



# 淫辱の秘書研修

令嬢は性隷に堕ちる

小説：岡下誠

挿絵：ズンダレぼん

立ち読み版

KTC  
KILL THE COMMUNICATION

終章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
.....	秘書のお披露目.....	接客の練習.....	日常業務.....	淫辱の秘書研修.....	面接試験.....	.....
243	196	165	108	54	16	4

## 登場人物

Characters

### 朝倉弥生

(あさくら やよい)

大手信託銀行の総務部に勤務する二十五歳。黒髪長髪で、清楚可憐な令嬢といった雰囲気的女性。同行に勤める恋人と婚約中。

### 霧原香織

(きりはら かおり)

弥生の先輩秘書で三十二歳。熟れ頃の美女で黒髪をアップにまとめている。眼鏡をかけていて知的な美貌。

### 鹿島岳男

(かしま たかお)

五十二歳という異例の若さで社長に就任したやり手。経営手腕は一流。

### 関島薫

(せきじま かおる)

弥生の婚約者。柔らかな物腰で細身の青年。



つい先ほど、その肉柱で味わわされた汚辱が思い出される。そして、それをはるかに上まわる快樂もありありと甦った。

（んああ、あつ、あん……。ゆ、指なのに……）

社長の中指が、男性器そのものでもあるかのように感じられてしまう。牡欲のこもった中指で突き上げられると、男性器でえぐり上げられたのにも等しい快樂を味わされた。社長の逸物に魅入られたまま、弥生は女の喜びに悶えている。

（ま、また……。いつてしまいます……。いつてしまいますわ……）

気をやる寸前にまで追いやられたその時、いきなり中指を引き抜かれた。

「はあ……。ど、どうして……」

思わず切なげな溜め息をもらしてしまい、はしたない自分を恥じる。

二十五歳の肉感的な女体は欲求不満を訴え、無毛に剥き上げられた女花肉はおねだりの蜜涙をあふれさせていた。気をやれそうでやれなかったもどかしさに、女芯はふくらみきっている。ブラジャーの内部でも、はち切れるばかりに乳首が尖り立っていた。女の肉体に息づく三つの蕾が浅ましく勃起しているのだ。

「何か不満でもあるのかな、弥生くん？」

女陰の切なさに悶えている令嬢秘書を、社長は淫猥な眼差しで見やっている。

「い、いえ……。何でもありませんわ……」

そう言いながらも、無毛の女唇からはおねだりの蜜汁が滴っていた。

「紅茶が飲みたいな。香織くん、紅茶の入れ方を教えてやってくれないか」

「承知いたしました」

香織と弥生とは、股間の秘めやかなところをあらわにしたまま秘書室へと下がる。

「お茶を運ぶ時、トレイは必ず両手で持ちなさい。研修中の秘書は、剥き出しのあそこで社長やお客様の目を楽ませるのよ」

「は、はい……」

先刻は剃毛器具を乗せていたトレイで、高価なティーセットを運んだ。両手でトレイを持つているため、翳りのない女陰花があらわになっている。

（は、恥ずかしいですわ……）

上半身にスーツを着ていることで、何も穿いていない下半身が際立っていた。ことさらに女性器を露出しているかのようで、性隷秘書に堕ちたことを実感させられる。少しでも女陰を隠そうとして、無意識のうちに内股気味になってしまう。

「もつときびきびと歩きなさい」

剥き出しの尻肉を香織に平手打ちされた。

「ひっ……。申し訳……。ありません……」

恥じらいながらの内股歩きは、弥生の意に反して淫らなものを匂い立たせていた。股間の底の秘めやかなところに社長の視線を感じ、さらに歩みが遅くなってしまう。

「お、お待たせいたしました。紅茶でございます……」

「おお、ありがとうございます」

ティーカップとソーサーを置こうとしたその瞬間、無毛の股間をまさぐられた。

「んひっ……」

ソーサーを持つ手がわななき、カップとぶつかって小さな音を立てる。

「さ、砂糖は……ご入り用でしょうか……」

「砂糖は入れない主義だが、弥生くんの蜜ならば歓迎するよ」

濡れ潤んだ女肉穴へ人差し指と中指を突き入れられ、荒々しく抜き差しされた。

「あああ、あひっ、ひい……。あん……。お許し……。ください……」

左手はトレイでふさがっているし、右手には紅茶を満たしたカップがある。隠しようにもなくあらわになった女陰門を二本指で犯され、女の喜びを奏でられた。

「指を……。抜いてください……。あああ、んっ……」

つい先ほどまでの姿勢指導で、弥生は気をやる寸前にまで高ぶらされていたのだ。

あと少しというところでお預けされた女陰穴は牝欲の溶鉱炉となっており、指で突き上げられただけで熱い蜜汁をあふれさせてしまう。二本指で奏でられた快楽は腰の芯にまで響き渡り、きつくよじり合わせた脚でさえわなないてしまった。

「どうしたの、弥生さん？ 紅茶がこぼれそうよ」

懸命になってこらえている令嬢秘書を、香織は淫らな眼差しで觀賞している。妖艶に咲き誇った女陰花を牝蜜に潤ませ、包皮が剥け返るほどに女芯を勃起させていた。

「社長秘書なんだから、あそこをまさぐられたくらいで取り乱さないの」  
お尻を撫でまわされ、その合わせ目を上下になぞられる。

「そ、そんなことをおっしゃられても……んあ……あんっ……」

ソーサーを持つ右手は細かにふるえ、カップの中の紅茶に細波が立っていた。

「あそこではいくら泣いてもかまわないけれど、立ち居振る舞いは優美になさい。心は淑女、肉体は牝。それが社長秘書の心得よ」

紅茶のソーサーを持ったまま快楽に悶えている弥生へ、社長も淫猥な視線を這わせている。そびえ立つ男性器を脈動させ、裾広がりの亀頭をぬらつかせていた。

「ここをこすってあげれば、もっと蜜を出してくれるかな」

切なさど快楽とでふくらんでいる女芯を、親指でこすりまわされる。

「ひっ……んひいひいひい……」

包皮から剥け出ている勃起女芯をしたたかに揉みこねられ、めくるめく快楽が全身を駆けめぐった。二十五歳の女体は歡喜の脱力に見舞われ、がくと腰が落ちる。

「あっ……」

ティーカップは倒れ、社長のデスクに紅茶がぶちまけられた。

紅色の液体が広がってゆく様を、弥生は恐怖とともに見つめている。社長の指姦が原因とはいえ、それを主張しても聞き入れられないであろうことは薄々察していた。

「とんでもない粗相をしかせてくれたわね」

知的美貌の社長秘書は淫虐な微笑を浮かべている。いつの間にか用意したおしぼりで机の上を拭きつつ、怯えおののく令嬢を眼鏡越しに見つめていた。

「も、申し訳ありません……」

下半身裸という淫らな姿勢に剥かれ、無毛の女陰を執拗に指姦されたというのに、弥生はお詫びの言葉を述べることしかできない。

「ちようどいい。弥生くんには、お仕置きの受け方を覚えてもらおう」

濡れそぼった女蜜壺から指が引き抜かれた。それは、恥ずかしい接遇指導が終わったことを意味するのではなく、さらに恥ずかしいお仕置きの開始を意味している。



「かしまりました。そのようにいたします」

何ひとつ穿いていない尻肉を、香織にねちねちと撫でまわされた。

「机に両手をつきなさい。お尻を後ろに突き出すのよ」

「は……はい……」

恥ずかしさに灼かれながらも弥生は身を屈め、デスクの上に手のひらを置いた。剥き出しの豊尻を後ろに差し出し、お仕置きを受けるのにふさわしい姿勢になる。

理不尽な理由で懲罰が科されようとしても、弥生は抗議すらできないのだ。

「正しい作法でお仕置きを受けるのも、社長秘書としての大切な務めよ。服従と反省の意思を示すため、何も穿いていないお尻を差し出すのよ」

尻肉の割れ目を深々とまさぐられても、ひたすらにこらえるしかない。谷底に息づく恥ずかしいすぼまりを悪戯されまいとして、わずかに腰をくねらせるばかりだ。

「社長。叩き方はいかがいたしましたでしょうか？ 私といたしましたは、最初に厳しさを教え込むために、鞭を使つてはどうかと考えますが」

嗜虐の匂いにするその言葉に、弥生は震え上がってしまう。

「研修の初めから鞭の痛みを教えるのは、お嬢さま育ちの弥生くんにとっては少し酷だろう。平手打ちでかまわないよ」

社長は少しだけ椅子を後方にやり、お仕置きに怯えている令嬢秘書を真後ろから眺めていた。下半身裸で尻肉を差し出している様に、男性器を脈打たせている。

「社長のお慈悲に感謝しなさい。でも、そのお慈悲に甘えて机から手を離れたら、最初からやり直しよ。弥生さんの態度次第では鞭を使うから、そのつもりでね」

知的美貌の社長秘書は弥生の左側に立ち、豊尻の割れ目を右手で撫でまさぐっていた。その手つきはやさしいが、令嬢にお仕置きすることへの喜びが感じられる。

「お仕置きは、ただ受ければいいというものではないの。お仕置きをしてくれる人に感謝しながら、丁寧に挨拶するのよ」

屈辱的な挨拶を耳元にささやきかけられた。

（そ、そんなことまで……言わなければならぬなんて……）

弥生は恥辱に悶える。しかし、逆らえばさらなる恥辱刑が科されるのだ。

「ど、どうか……粗相をした弥生に……お尻叩きの罰を……お与えください……」

尻肉を後ろへ差し出ししながらの挨拶そのものが、恥辱罰となつて弥生をさいなんでいる。一言一言を発すること、性隷秘書に堕ちたことを知らしめられた。

「反省と服従の心を、しっかりと学びなさい」

尻の割れ目をまさぐっていた手が、大きく振り上げられる。

「いくわよ」

後ろへ突き出されている豊尻に、香織の平手が勢いよく打ち下ろされた。肉を打つ音とともに鋭い痛みが響く。

「んうう……」

低い呻きをもらしながら弥生は身を強ばらせた。

「痛いかしら？ でも、鞭の痛みはこんなものではないわよ」

眼鏡をかけた美人秘書は、続けざまに平手打ちを繰り返す。

「んっ、んくう、んああ……んひい……」

最初の一打二打は唇を結んでいたが、三打目、四打目を与えられると、唇がほどけてくる。お尻の痛みに屈して、悲鳴を上げてしまったのだ。

(こ、こんな恥ずかしい格好で……お尻を打たれるとは……)

何も穿いていない尻肉を捧げ、打たれても打たれてもお仕置きの姿勢でいなければならない。痛みもさることながら、灼けるような恥辱が弥生をさいなんている。

「お尻が前に逃げているわ。もつと後ろへ突き出しなさい」

香織の左手が下腹部を這い下りてきて、股間の底にあてがわれた。剃毛された無毛股間を後方へと引き寄せられ、打つてくださいますとばかりに豊尻が差し出される。

「あああ……」

濡れ潤んだ女陰門に左手中指がめり込んできて、弥生は熱い喘ぎをもらす。

「ほら。こうすれば腰を前に逃がせないでしょ」

肉づきよい豊尻を左右交互に平手打ちされた。

びしっ……ぱしっ……ぱしっ……びしんっ……。

肉を打つ音が社長室に響く。

下半身を裸に剥かれた令嬢秘書は、無意識のうちに腰を前へ逃がそうとしていた。

しかし、香織の左手にさえぎられて、尻肉は後ろへ突き出されたままだ。

(あああ、んああ、あん……。あそこが……。あそこがこすれて……)

股間を前へ逃がそうとすると、そこにあてがわれている左手に女陰をすりつけることとなってしまう。肉門の合わせ目へめり込まされた中指にこすられ、女の喜びを奏でられるのだ。姫花卉や女芯を刺激され、尻打ちのたびに快楽を味わわされる。

「弥生さんのあそこ、じゅくじゅくに濡れているわよ。本当に反省しているの？」

香織にからかわれて、ますます恥ずかしさをかき立てられた。

「は、反省しております……。どうか……お許しください……」

「反省の度合いは、お尻の肌で判断するの」



腫れて熱を帯びつつある尻肉へ、香織の平手打ちが襲いかかる。

「んああ、あつ、あん、ああん……」

打たれるたびに発せられる悲鳴が、甘い音色を帯びつつあった。香織は、右手での平手打ちに合わせて、左手中指を故意に女陰門へめり込ませているのだ。うずきにうずいていた女唇をこすられ、官能をかき立てられる。尻肉へは痛みを与えられ、女陰門では快楽を味わわされ……。次第に、痛みと快楽が分かち難くなってきた。

「叩けば叩くほどあそこを濡らすなんて、お嬢さまとは思えないほどの淫らさだわ」  
眼鏡をかけた美人秘書は、赤くなつた尻肉を右手で撫でまわしつつ、左手で弥生の女陰門をまさぐっている。中指の先で花びらをかき分け、女芯をこすり上げた。

「あああ、んっ、んう……あんっ……。濡らしてなど……ああん……」

「私の指をここまで汁まみれにしておきながら、まだ濡らしてないと言い張るつもりかしら？ 鞭を使う必要があるよね」

嗜虐の匂いがする声音でささやきながら、剥け女芯をこねまわす。

「鞭でお仕置きは……お許しください……」

感じやすい蕾を責められて、女肉穴は物欲しそうに収縮していた。赤く色づいた尻肉は痛みを訴えているのに、無毛の女陰は快楽に悶えているのだ。

指先の蠢きに強いられて、弥生は尻肉をくねらせてしまう。社長の方に突き出した豊尻を揺すり舞わしている様は、さらなるお仕置きをねだっているかのようだ。

身を屈めている弥生の下半身は裸で、肉感的な美尻があらわになっている。その美尻を打つ香織も、下半身にはガーターベルトとストッキングしか着けていない。気品の漂う令嬢も、眼鏡をかけた知的美女も、スカートを穿いていないのだ。

その光景を見つめる社長は、黒革張りの椅子にかけてたまま男性器をそそり立たせている。その肉胴はたくましく、笠を広げた亀頭はぬらぬらと光っていた。

「どうだろう、香織くん。鞭を使うのも結構だが、弥生くんに服従を教え込むには、もっと効果的な方法があると思うのだが」

遠回しなその言葉だけで、香織は社長の言わんとすることを察したようだ。

「よいお考えかと。早速、そのようにいたします」

香織の手で両手首をつかまれ、腰の裏へとまわされた。

「な、何を……?」

「弥生さんのような新人を躰けるには、こういうお仕置きが最も有効なのよ」  
後ろ手に拘束されたまま社長の方を向かされる。

「あああ……」

婚約者が寝ているベッドで四つん這いにされて、あり得ざる男性器を打ち込まれた。「ひっ……ひい……あん……。そんな……薫さんの前でなんて……ああん……」

社長と香織とによって交互に貪り犯され、めくるめく歓喜を奏でられる。

眠りに落ちていた関島の前で、何度も気をやらされてしまったのだった。

明くる朝、目覚めた弥生は昨晚以上の罪悪感に心を灼かれた。婚約者と寝所をともにしていたのに、その夢の中ですら社長と香織とに姦通されてしまったのだから。

股間に目をやると、失禁したかと見まごうほどに下着が濡れていた。

（本当にごめんなさい……。私の心は薫さんのものだけ……。私の身体は……。社長のものになってしまったのですわ……）

心の中で懺悔しつつ、弥生は目の前の男性器に口唇と乳房とを捧げている。

（いいえ……。心までも社長に征服されてしまったのかもしれないわ……）

秘書研修の名のもとに繰り返し社長の肉柱で蹂躪され、何度となく気をやらされ、心の奥底まで社長秘書の刻印をされてしまった。恥辱と快楽に彩られた躰をされて、服従と崇拝を教え込まれたのである。

今や、社長と相対しているだけで発情を余儀なくされてしまう。



社長の声を聞いただけで身体が火照った。スーツ越しに肩をさわられただけで、何も穿いていない股間が官能にうずく。お尻の合わせ目をなぞり上げられようものなら、乳首も女芯もぴんぴんに勃起してしまう。

奉仕を命じられ、逸物を取り出すためにひざまずいただけでも胸が高鳴った。スラックスにできたふくらみへ触れると、その固さに女の本能を刺激されて、女陰の花びらがひとりりで咲きめくれる。男性器のまがまがしい姿を目の当たりにし、その脈動や熱さを直に感じ、むせ返るように濃厚な匂いを嗅がされると、うずうずとした女肉穴からはとめどなく蜜汁があふれるのだった。

心までも性隷秘書に堕ちた弥生は、恍惚の顔つきで社長の男性器に尽くしている。「おしやぶりをさせていたただいていただけで……身体が……んうう……んあ……」

龟头を膨張させている牡欲は、唇や舌の粘膜からも流れ込んできた。

二十五歳という女盛りを迎えた肉体は、口唇ですら牡の欲望を感じ取ってしまった。肌という肌は火照りを帯び、性感帯となっていた。元々からして感じやすい乳首や女芯は、はち切れるばかりに勃起している。この上なく敏感になっている蕾を刺激されれば、しとやかで気品ある令嬢といえども淫らにより乱れてしまうのだ。

弥生が奉仕をしているはずなのに、むしろ弥生の方が快樂を味わわされている。

全身の肌が性感帯になっているため、豊乳の谷間で男性器をこすっているだけでも官能を奏でられた。勃起して感度を増した乳首は、高級スーツのなめらかな布地にこすられて、細かにわなないている。性感帯ではないはずの唇でさえ、亀頭にみなぎった牝欲にあてられて、女の喜びを感じてしまう。

（あああ、あつ、あん……。あそこが……。たまりませんの……。はああ……）

産毛の一本まで剃毛された股間では、女唇が牝欲のうずきを訴えていた。亀頭を吸っている唇を羨んで、下半身の唇は蜜を滴らせている。肉門をほころばせ、花弁を咲かせ、女芯を剥け返らせつつ、おねだりの蜜汁をあふれさせているのだ。

股間のわだかまりをこらえきれず、弥生は太腿同士をこすり合わせている。そうすることで脚の付け根を摩擦し、悶々としている女陰を慰めようというのだ。

しかし、どんなに太腿同士をこすり合わせようと、ほんのわずかな刺激しか得られない。欲求不満に泣き濡れている女陰を満足させるにはほど遠く、もどかしさが募るばかりだ。わずかながらの刺激に、かえって牝欲をかき立てられてしまう。

（唇だけでなく……。あそこの唇にもお情けをくださいませ……）

とうとう弥生はお尻をうねらせ始める。女陰に取り憑いた淫情を我慢できず、はしたない仕草と知りつつも尻肉をくねり舞わせずにはいられない。



乳房の上げ下げに合わせて美尻を揺すり、男性器を用いての研修を懇願している。

「まあ、弥生さんだったら……。ご奉仕の最中だというのに、はしたなくお尻を振ったりして。それでも良家の令嬢なの？」

眼鏡をかけた知的秘書は、黒の乗馬鞭を弥生の尻肉へ触れさせた。

「んああ、あつ、あん……。お許しください……。あそこがうずいて……」

「社長のおちんぽにご奉仕しているのだから、あそこがうずくのは当然でしょ。だからといってお尻を揺すつておちんぽをおねだりするなんて、秘書にあるまじき行為よ」  
香織の言葉には、粘りつくような淫虐さが濃密に香っている。

「そ、そのようなつもりでは……」

唇では否定していても、無毛の股間に息づく秘めやかな唇は発情の蜜汁をもらしていた。ぴんぴんに勃起した女芯は、愛撫を求めて包皮をずる剥かしている。

「私があそこを慰めてあげるわ……」

ふしだらに濡れ咲いている女陰花へ、乗馬鞭の穂先を押しあてがわれた。

「ああんっ……」

電気刺激を受けたかのように弥生は女体を引きつらせる。女陰花はうずきにうずいていたため、鞭先を押し当てられただけで快楽を味わわされてしまったのだ。

弥生にとって社長の男性器が崇拜の対象であるように、香織の黒鞭も畏怖の対象である。黒の乗馬鞭は、言うなれば香織の『男性器』なのだ。乗馬鞭の先端には彼女の淫情がこもっており、それで触れられただけで官能の琴線を刺激された。女唇の秘粘膜は特に感じやすく、乗馬鞭から発せられる淫気で愉悅を奏でられる。

「社長のおちんぼには遠く及ばないけれど、私の鞭も気持ちいいでしょ」  
眼鏡をかけた知的秘書は、鞭柄のしなりを活かして、女陰門の合わせ目をまさぐり上げる。香織の手に操られると、乗馬鞭は蛇のようにくねった。その穂先は女陰門に深々とめり込み、花卉をかき分けるようにして秘粘膜をこすり上げる。

「んああ……んうう……あん……。香織さんの『もの』……気持ちいいですわ……」  
指よりも細い乗馬鞭とはいえ、男性器に匹敵する存在感で弥生をよがらせていた。発情して咲きめくれた女陰花を固い鞭先でえぐり上げられるたび、官能の旋律が鳴り渡る。剥け返った女芯をまさぐられると、肉感的な美尻は歓喜にわなないた。

乗馬鞭に責め廻られて、無毛の女陰門はますますの蜜汁をもらしている。  
（香織さんの『ちんぼ』で……あそこが嬉し泣きしていますの……）

悶々としていた女肉穴は、細かに収縮しながら蜜の涙を流していた。直接的な愛撫を歓迎するとともに、もつと太いものをくわえ込みみたいとねだり泣きしている。

生きていくようにくねる乗馬鞭に責められて、豊麗な尻肉はますます揺れ舞った。

「弥生さん。おちんぼへのご奉仕がおろそかになっているわよ」

女陰門の合わせ目に鞭柄をめり込まされ、容赦ない上下動でこすり責めされる。

「ひっ、ひいつ……んひいい……。お許しください……。んあ、んうう……」

剥き身となった女芯を固い鞭柄でこすられ、令嬢秘書は歓喜の悲鳴を上げた。

灼けるような快楽に駆り立てられて、亀頭をむしゃぶり吸う。法悦の表情で亀頭をくわえ込み、憑かれたような激しさで吸いしごいた。

豊乳をすくい上げている手を、今まで以上の速度で上げ下げする。たわわな乳房は淫奔に揺れ弾み、そそり立つ男性器を包み込んでしごき抜いていた。

「おお。この奉仕ぶりなら、お客様を接待させても恥ずかしくないな」

社長は、悠然と椅子にかけたまま令嬢秘書を見下ろしている。

その態度こそ余裕に満ちていたが、たくましい男性器は快楽に跳ね悶えていた。

「ああ、あつ……あん……。い、いきそうです……。んああ……。んうう……」

激しく奉仕するということは、その反作用としてさらなる快楽を味わわされることでもある。勃起して感じやすくなった乳首をスーツにこすられ、女の喜びを奏でられた。ふくらんだ乳首は脈動し、見えざる乳汁を噴き出している。

「社長を満足させる前に気をやるなんて、許されない失態よ。我慢なさい」

こらえることを命じながらも香織は、より一層の執拗さで乗馬鞭を操った。剥き身の女芯へ鞭先をあてがい、柄のしなりを利用してこすり上げる。

「んあ、あひつ。ああん……。そ、そんな……。いきそうなんです……」

最も感じやすい肉粒を集中的に淫弄されて、弥生は官能によがり乱れた。醜悪かつ魁偉な男性器に乳房と唇とを捧げながら、股間の唇で歡喜の蜜涙を流す。

女体にある三つの蕾を刺激され、令嬢秘書は快楽を抑えきれなくなってしまふ。

「んううう、んっ、んんんううううううう……」

裾広がりの亀頭にむしゃぶりついたまま弥生は女の喜びを極めた。

奉仕をしているにもかかわらず、逆に気をやらされてしまったのだ。

歡喜の余韻にたゆたいながら弥生は床に座り込んでいる。

（わ、私……ご奉仕していたのに……胸の快感で果ててしまいましたのね……）

乳房で気をやつてしまう自分を恥じながらも、弥生は悶々としたものを発散しきれずにいた。指さえもくわえ込めなかつた女肉穴が、欲求不満を募らせているからだ。

濡れそぼつた女肉穴は物欲しそうに収縮し、おねだりの蜜涙を流している。

ぐつたりとしている令嬢秘書を、香織は冷ややかな眼差しで見下ろしていた。

「こんな粗相をしでかすなんて、鞭でのお仕置きは免れないわよ。お情けを頂戴するまで、弥生さんのお尻に躰をしてあげるわ」

眼鏡をかけた美熟女秘書は、艶黒の乗馬鞭を力いっぱい振るった。

「ひいっ……」

乗馬鞭が引き裂いたのは何もない空間。

しかし、空を引き裂く音ですら弥生を怯えさせるには十分である。

「まあまあ、香織くん」

巨軀の男性器をそびえ立たせたまま、社長は美熟女秘書をなだめた。

「それよりも少し尿意を催してしまつてね。弥生くんには、トイレでの排泄奉仕を覚えてもらおうかと思つているのだが」

「承知いたしました。やり方は教えてありますので、実践のよい機会かと」

弥生が連れて行かれたのは、トイレではなくシャワールームである。

隙間なく大理石が張られたシャワールームは、本来とは別の目的も持っているのだ。（や、やはり……ここに連れてこられるのですね……）

どうしてトイレではなくシャワールームに連れてこられたのか、あらかじめ香織から聞かされていた。排泄奉仕の内容たるや、信じられないほど屈辱的なものである。



（できませんわ……。こんな恥ずかしいこと……。私にはできませんわ……）

弥生が立ち尽くしていると、黒い乗馬鞭で尻肉を撫でられた。

「さあ、弥生さん。教えた通りにしなさい」

なおもためらっていると、香織の熱い息吹で耳をくすぐられる。

「お尻に赤い鞭痕を刻まれないのかしら？」

「も、申し訳……。ありません……。いたしますから……。どうか鞭だけは……」

鞭打ちの恐怖に屈した弥生は、恥辱にまみれなければならない運命を呪った。

恥ずかしさに灼かれながらガーターベルトとストッキングとを脱ぎ、下半身裸になる。大理石張りの壁に両手をつき、背中を反り返らせるようにして尻肉を後ろへと突き出した。素肌の美脚を大きく広げて、丸裸となった美尻を社長の方へと差し出す。

まさに、犯してくださいと言わんばかりの姿勢だ。

尻肉の丸みは余さずあらわになっているし、女陰門の盛り上がりもそこに咲く姫花弁もあからさまになっている。それどころか、尻穴のすぼまりまでが社長の視線にさらされていた。下半身に息づく秘器官を、二つとも視姦に供しているのだ。

（社長の視線が……。お尻とあそこに……。あああ、あつ……。あん……）

粘つくように淫猥な視線は、実体をともなっているかのようである。

触手さながらの視線は、尻穴のしわを一本一本まさぐり、剥け返った女芯を吸いごき、濡れそぼった女肉穴をえぐり上げていた。

見られているだけでさえ恥ずかしいのに、視線触手でよがらされてしまったのだ。そればかりではなく、弥生にはさらなる淫辱儀式が待っている。

「ど、どうか……私のお尻を……便器になさってください……。私のお尻に……社長の尊いお小水をお恵みくださいませ……」

その挨拶をしただけで、弥生は激しい恥辱に灼かれた。

社長の欲望を満足させるために尻肉を差し出したこともあつたし、お仕置きを受けるために這いつくばったこともある。

だが、おしっこを受け止めるために尻肉を捧げようとは思つてもみなかつた。白桃のような美尻は、尿水をあびせられるための肉便器におとしめられたのである。

「うむ。このような便器で放尿できるとあれば、お客様もお喜びになるだろう」

高級スーツを隙なく着こなしている社長だが、フアスナーからは男性器をそそり立たせていた。高級スーツが社長の社会的地位を象徴しているとすれば、隆々と勃起している男性器は牡としての力強さを象徴している。

「もちろん私も、これからは弥生くんのお尻を便器として利用させてもらうよ」

「光栄に……存じますわ……」

紅蓮の恥辱に灼かれつつも、弥生は従順に美尻肉を差し出していた。半開きの唇からもれたささやきは、半ば偽りであつても半ばは本音である。

（おしっこをかけられるなんて……恥ずかしいのに……）

良家の令嬢に生まれた弥生にとって、お尻に尿水をかけられるなど想像したことすらなかった。その屈辱儀式に、生け贄として臨んでいるのだ。

しかし、恥辱が激しければ激しいほど、なぜか女体が高ぶつてしまう。倒錯の興奮をかき立てられて、肉感的な肢体が妖しい火照りを帯びる。

（あそこが……ふしだらにうずいてしまいますの……）

姫花弁は、尿水をかけて欲しいとばかりに咲きめくっていた。牝欲に悶えている女蕾も、おしっこの奔流をねだるかのように勃起している。そして女肉穴も、男性器から噴き出すものなら尿水でも構わないとでもいうように収縮していた。

「弥生くんも、尻便器に興奮しているようだね」

社長は、天を衝くかのごとき男性器を弥生の尻肉へ突きつける。

「ふむ。香織くん、少し角度を調節してくれないか」

「承知いたしました」

眼鏡をかけた知的秘書は、嫣然とした微笑とともに社長の足元へひざまずいた。強ばりきつている男性器を両手でうやうやしく握り、ほぼ垂直にそびえている肉柱を押し下げるようにして、濡れ咲いた女陰門へと照準を合わせる。

「いいこと、弥生さん。お客様がご自身の手でちんぽをさわるのは、私たち秘書にとって失態なのよ。スラックスからちんぽを取り出して、またスラックスの中にお納めするまで、全て秘書の手でしなさい」

「は……はい……」

弥生は、背中を反らせて尻肉を突き出したまま、その時を待っていた。理性では拒んでいるのだが、これまでの秘書研修で教え込まれてきた被虐嗜好が心を波立たせている。女肉穴は喰い締めを繰り返し、おねだりの蜜をもらしていた。

(ひと思いに……おしっこをかけてくださいませ……)

待っている時間そのものが弥生の羞恥心を煽り立てている。

令嬢秘書の思いを知ってか知らずか、社長は美尻便器をじっくりと観賞していた。

「お尻の穴か、それともあそこか……。どちらにするか悩みどころだな」

今か今かと怯えおののいている弥生は、尻穴か女陰かという恥辱の二者択一を突きつけられて、ますますの緊張感と羞恥とに悩まされた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!